



オーストラリア直送レポート

Vol.7 2018.8.19 別れの日

● ドリップストーン校グループ／教育委員会社会教育課・井口
吉備中学校・田中

● パーマストーン校・ローズベリー校グループ／教育委員会社会教育課・松場
八幡中学校・島田

ドリップストーン校グループ

ついに、オーストラリアから帰国する日がやってきました。集合時間が近づくと、研修生達がホストファミリーに連れられ、空港にやってきました。もうすでに、泣いている研修生や、ホストファミリーとハグをしている研修生達もいました。8月10日に現地に到着し、今日までの短い間で、絆を深めた研修生達に感心しました。それと同時に、研修生をあたたかく迎えてくださったホストファミリーの方々に感謝の気持ちでいっぱいになりました。「帰りたくない」という研修生が多く、この研修が彼らにとって、かけがえのない研修になったことを確信することができました。



研修生達が何を感じて、何を得たのかは、それぞれ違うと思いますが、研修生達にはこの経験を、必ず将来や普段の生活に生かして欲しいと思います。また、感謝の気持ちだけは、全員が忘れないで欲しいと思います。現地研修では、ホストファミリーの他にも、多くの方々の支えがありました。現地の先生方は、有田川町の研修生達のために、普段とは違う授業をしてくださり、現地の生徒と交流できるように工夫し

てくださいました。現地の生徒達は、気軽に話しかけてくれ、英語が伝わらなくても、優しく研修生達の話の聞こうとしてくれました。また、引率教師の田中先生は、事前研修時から、研修生達に寄り添って、指導をしていただきました。また、現地で体調が悪くなった子がいたときは、研修生に付きっきりで対応してくださいました。添乗員さんも、研修生達に分かりやすく案内をしてくださり、スムーズな研修に協力してくださいました。私自身も今回の研修で、研修生達が成長には、研修生達自身の力もありますが、周りの方々の支えも非常に大きいと実感することができました。



帰りは、シンガポールで研修を行い、日本に帰国しました。研修生達は近代的な建物に驚きながら、オーストラリアとの違いについて「じめじめしている」や「生えている植物が違う」など、異文化を体験することができました。帰りの飛行機の中では、オーストラリアでの生活について、思い出に浸るように話をしていました。飛行機の中でも、「オーストラリアに帰りたい」という声が聞こえてきました。研修生達には、現地で出会った人たちとの交流を絶やさないで欲しいと思います。現代ではEメールなどでコミュニケーションを取ることもできますが、彼らが日本に来たときや、研修生達がオーストラリアに行ったときに、再会するなど交流をさらに深めて欲しいと思いました。そう思える程、空港でホストファミリーと別れる時の研修生達の様子は非常に感動的でした。研修生達の様子を見て、これほど貴重な経験をしている彼らを、羨ましく思いました。現地研修は終わりですが、帰国してからも事後研修があります。研修生達が経験した、貴重な体験を無駄にしないように、最後まで研修生達のサポートをしたいと思います。(井口)

みんなの笑顔と、みんなの涙で、無事に研修を終えることができました。今回の研修でも、多くの人の温かさや優しさ、オーストラリアの人たちの大きな心の持ち方に触れられました。

準備の段階から、自己紹介スピーチを、何度も何度も練習して、より良いものにしようと頑張りました。本番では、本当にかっこよかったです。伝えたいという思いの大切さを知れたと思いますし、十分に伝えられ、とても良い場面でした。

授業では、何とか英語を聞き取ろうと頑張りました。休み時間も、いろんな人と話そうとしていて、頼もしいなと思いました。日本の文化であるアニメや音楽については、特に興味を持ってもらえると知れましたし、それらを介して笑顔が広がることも、体感できました。

学んだこと、感じたことを思い返しながら、自分たちのために多くの人たちが、力を動かしてくださっ

ていたことを、再度確認していきたいと思います。9月には、オーストラリアの皆さんが、有田川町に来てくださいます。その時が、まずお返しできる機会であるかと思います。いろいろ経験できたたくさんの方のことを、自分たちだけのものとせず、広げていってもらえればなとも思います。その役割をいただいたのだと思います。

今回、先生方と交流する中で、仕事についても交流できました。「aの方法でやってみてダメなら、ほかにアルファベットはb～z、25通りある！」と、会議室の壁に貼ってありました。一人一人の生徒さん向き合う姿勢がうかがわれ、共感しました。自分にとっても、たくさん良い経験でした。

お別れの空港へは、すでに涙をいっばいためた生徒が集まってきました。出会えた方々や思い、すべてを心に留めて、これからの生活につなげていけるよう、みんなと、私も努めていきたいと思います。自分の担当する生徒のみなさんで行けたこともうれしかったです。ありがとうございました。(田中)

パーマストン校・ローズベリー校グループ

今日はオーストラリアで過ごす最後の日です。過ぎてしまうとあっという間の10日間でした。昨年に引き続きの研修引率となりましたが、今年度は土日を挟んだ日程となったことから研修生がホストファミリーと過ごす時間が増えました。ホストファミリーにとっては負担が増えた形となりましたが、研修生にとっては家族と過ごす時間が増えました。結果的にオーストラリアの温かいご家庭に囲まれた生活では密度の濃い交流を図れたのではないかと想像します。今回の空港でも見られましたが、ホストファミリーとの別れを惜しむ光景があちこちで見られました。



また研修生たちも口々に「帰りたくない」と言っていました。半面、「早く家に帰って湯船につかりたい」などと話している研修生もいました。文化や風習の違いを体験しながらも、あらためて自分が生まれ育った家庭の良さが知る経験にもなったのではないのでしょうか。



今回の研修で一番印象に残ったのはパーマストンカレッジの先生方の研修生受け入れに対する熱心さです。特に今回コーディネート役とホストファミリーをしてくださったアニータ先生には感謝の言葉しか見つかりません。研修生の受け入れについて、授業参加について、そして生徒同士、子ども同士の交流について考えていただきました。新しい試みとして、ホストファミリーとの交流時間を設けるためにお別れ夕食会を実施してくれました。研修生、ホストファミリー、事務局、そして先生方が交流を深めることで今後の海外研修の深化が想像できました。現地での研修を終えたあとは日本での事後研修が待っています。

研修生たちと共に全力で取り組みたいと思います。(松場)



いよいよオーストラリアでの研修を終えて、ダーウィン出発の日を迎えました。空港にはホストファミリーのみなさんが、たくさんお見送りに来て下さいました。オーストラリアでの全ての思い出がよぎって、別れはいつも胸一杯になります。最後まで研修生達の体調を気遣って下さる姿を見て、改めて本当の家族として生徒達を見守って下さっていたことに対する感謝の気持ちで一杯になりました。先生方も、忙しい中、この研修のためにいろいろ企画・運営していただきました。ほんとうにありがとうございました。

「おもてなし」という言葉が日本のオリンピックのPRに使われましたが、ホストの方々には日本人以上にその心を持って私達を歓迎してくれます。「国際交流」とは何も特別なことではなく、人種や国境を超えて、世界の人々と尊敬の心を持って接することだと思います。今回の事前研修では、原住民のアボリジニーの文化や、その人々の歴史などについてあまり触れる時間はありませんでしたが、みやげもの店には、必ずアボリジニーのみなさんの作品があり、町中でもその人々の姿を目にする機会もあったかと思います。感じたことや疑問に思ったこともたくさんあったのでないかと思います。そんなこともぜひ、これからの勉強の糧にして欲しいと思います。異文化に触れることは、改めて自国の文化を認識することにつながります。日本との違いに気付くことで見えてくること、感じることはたくさんあります。それと同時に住んでいる場所は大きく違っても、「変わらないもの」もあります。今は実感することができなくても、きっとみなさんはこの研修でそんなものを肌で吸収しているはずで、これからの人生の中のふとした瞬間に、きっとそれは生きてくるでしょう。多感な中学生のこの時期に、この研修を通して得るものは、他には変えられない宝物です。この機会を作って下さっているみなさんのふるさと、有田川町への感謝、家族への感謝を忘れないで欲しいと思います。

経由地のシンガポールでは、夕食に「スチームボード」(日本のお鍋)を戴き、マーライオンとたくさんの企業が入った高層ビル群の素晴らしい夜景に触れる機会も得ました。「もう一度シンガポールに来てみたい。」そんな声があちこちで上がっていました。深夜シンガポール出国。5時間あまりの飛行で無事、関空に帰国。お迎えに来て下さった役場の職員のみなさんのお顔を拝見し、ほっと

安堵しました。

バスに揺られて高速のトンネルを抜けると、懐かしい有田川町の風景。首を長くしてみなさんの帰りを待っていた家族のもとに、みんなそれぞれ帰って行きました。「ありがとうございました」と温かく声をかけて下さる家族のみなさんの声かけに、私の疲れも吹き飛びました。私も研修生のみなさんと同じく、たくさんの貴重な勉強をさせて頂くことができました。この研修で繋がったたくさんのご縁を大切に、今後も少しでも国際交流のお手伝いできれば、と考えています。松場さん、井口さん、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

少し前とは全く違う風景に、まだ半分身体がオーストラリアに残っているような不思議な感覚がします。遠く離れたオーストラリアから、そんなに簡単に身体は戻ってこないです。少しずつ日本の感覚に戻っていくこの時間も大切に味わいつつ、2学期のスタートに備えたいと思います。(島田)